MAUNG THAYA
マウン ターヤ作

# 路上にたたずみむせび泣く

Mattat yat lo lan hma Ngo

南　田　みどり 訳

ビルマ叢書
文学編 2

井村文化事業社 発行
勁　草　書　房 発売

マウンターヤ作

# 路上にたたずみむせび泣く

南田みどり訳

井村文化事業社

## 訳者紹介

南田みどり（みなみだ・みどり）

1948年　兵庫県伊丹市に生れる
1970年　大阪外国語大学ビルマ語学科卒業
1976年　大阪外国語大学大学院〈南アジア語学専攻〉修了
1978年　大阪外国語大学ビルマ語学科講師，現在に至る
主な論文
「テインペーミン短編小説の世界」（外国語外国文学研究1．1977）
「テインペーミンの長編にみる主人公描写」（大阪外国語大学学報第44号，1979）
「テインペーミンの小説における女性像のゆくえ」（同上第47号，1980）

路上にたたずみむせび泣く
〈ビルマ叢書文学編２〉

1982年６月15日　第１刷発行

著　者　マウンターヤ
訳　者　南田みどり　©
発行所　株式会社　井村文化事業社
東京都渋谷区道玄坂２—16—３

発売所　株式会社　勁草書房
東京都文京区後楽２—23—15
振替　東京　５—１７５２５３

落丁・乱丁本はおとりかえします
定価はカバーに表示してあります

製版　清水印刷
印刷　港北出版印刷
製本　谷島製本

0397-970901-1836

# 日本語版への序文

多くの人々同様、私も、タクシーをしばしば利用してきた。しかし、二十年以上も、こうして利用してきて、やっと気が付いたのだ。私だって、タクシー運転手の顔など、注意して見ていないじゃないかということに。これは、相手の運転手への蔑視ー運転手を対等に見ない、運転手風情は注目するに値しないといった発想による。人間どうしを差別するこういった思想は、実は私にはない筈だった。だが、確かに無意識のうちに差別していたのである。都市在住のインテリ層の大部分が、こういう具合だ。肉体労働者(肉体の力を元手として労働せねばならない労働者達)を卑しいものだと考えて接するのが常なのだ。しかし、このことに気付いて以来、私は後悔し続けた。タクシー労働者の立場が、いかにつらいものかを考え続けた。その気持が、この本を私に書かせたのである。

一九八一年九月　ラングーンにて　　マウンターヤ

# 初版への序文

この小説について、とりたてて申し上げることはない。ただ、この小説を書くにあたっての私の苦労や努力は、お話ししてみたい。

一九六八年七月、八月、私は陸上運輸局のタクシー労働者の暮らしを取材した。まず、陸運局総支配人に相談し、取材計画を練った。

管理職レベルの書類、報告書、管理機構、計画書などに目を通し、わからないことは関係者に聞くというのも、一つの取材方法だ。

だが私は、管理職レベルに取材するだけで事足りるとは思わなかった。だから、下積み労働者の群の中に身を投じた。その中に自己の生活を埋没させて、取材に正確かつ完璧を期したのだ。

従って、陸運局管轄下㈠貨物輸送部臨時副班長、㈡旅客輸送部切符販売係二等級、㈢四輪タクシー部運転手三等級となって取材した。国家のためならと、この取材に各方面で御協力下さった陸運局総支配人オゥンマウン中佐ならびに同局職員諸氏に、ここで深く感謝するものである。

取材にあたり、総支配人には、まずタクシー部支配人アウンタン大尉を、本部で御紹介いただいた。総支配人から支配人に、必要な少数の職員以外、誰にも事情をもらさぬよう口止めしていただいた。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かくして私は、新規採用のタクシー運転手の中に粉れ込み、運転手として任命されたのである。乗務する迄に、タクシー基地では、草抜き、地ならし、整列訓練などの荒仕事もおこなった。

そうして労働者達と対等に労働し、共に生活し、共に食べ、共に語ったメリットは、はかり知れない。

一週間後、我々新人に乗務命令が出た。それなりの規律に従い、勤務は始まった。運転手一人の果たすべき義務は重い。

八時間の勤務時間内で、最低一二〇マイル（注　約一九三キロメートル）走行すべし。最低四十五チャット（注　現在一チャット約四十円弱）の水揚げを確保すべし。車が破損せぬよう絶えず注意すべし。種々雑多な乗客とトラブルなく接すべし……などなど。実際、簡単な仕事ではない。やってみればわかるだろう。

短気な者、怠惰な者、軽薄な者、忍耐強くない者、失望しやすい者は、この仕事に全然向かない。

私の運転中も、ひどい酔っ払いが二人乗り込んできたことがある。一人は、後のシートから、私の肩に足をのせた。それも、履き物をはいたままでだ。それでも私は耐えた。不当な侮辱と知りながら、私は耐えた。その他、「おい、てめえ」と呼ぶ者が少なからずいた。話しかけるにも、「お前、俺」といった言葉づかいが多い。

そんな状況で、四十五チャットの水揚げにも力を尽くすのだ。私にとっては、揚げなくてもどうなるわけでもない。だが、四十五チャットのために、如何に消耗させられるかを知りたくて、挑んでみた。第五班に所属して乗務した十四日間。うち後半の七日は、四十五チャットを超過し

た。前半の七日は、まだ「コツ」がつかめていなかった。食べも、休みもせず走っても、四十五チャットに満たない。そこで、外部から支配人に電話し、援助を求めた。支配人は、売り上げの最も多い運転手とナンバーを、教えてくれた。そのリストをポケットに、こっそり運転手を尾行してコツがつかめたのだ。後半には、停車して休憩する余裕までできた。

合計二十一日間、私はタクシー部に勤務した。幸い、衝突事故はなかった。幸い、タクシー強盗にも会わなかった。

だが、二十一日間の労働は、私をすっかり憔悴させた。一時二時に帰宅する夜もある。排泄が一日中とどこおることもある。時々は食事時間を逃す。通勤用送迎車の屋根がないので、時々雨にあたる。一日中、下半身は暑く上半身は風にさらされる。胸と比べると、背中にばかり汗をかく。坐り続けで体がだるくなる……などなど。

ありとあらゆる苦痛が、寄ってたかって私を痛めつけたのだ。

とにもかくにも、この小説は完成した。この小説の目的は、タクシー労働者の暮らしを理解してもらうということにつきる。この目的がどれだけ達成されたかは、読者諸君が判断されることである。

このことだけを、お話ししておきたかったのである。

一九六九年　マウンターヤ

# 第一章

夜と朝(あした)のかさなる頃。

もはや夜は、とっぷりとした夜でなく。が、朝にすっかり入ったとも言い切れず。

もはや闇はなく。が、朝のように冴え冴えとは見えず。

この時刻、ソゥチョーは家を出る。

「今頃なら、キンマももう起きてるな。やることはみんなやって。買い出しに出かけるのに、めかしこんでることだろうぜ……」

道を歩きながら、そんなことをソゥチョーは思い浮かべる。

そしてソゥチョーは、ひとり笑いをする。空もまだ、さだかに明けやらぬうちに、俺の頭にまず入り込んで来たのが、キンマのこと。キンマの顔。

ほんとにどういうわけだ。キンマに、かくまでぞっこんまいってしまったのは。わからない。

彼は自分を問い詰める。

「さあ、言えよ、ソゥチョー君。どうして君は、こんなにキンマにまいっているのかね。」

附近で聞いている者など一人もいない。それを承知で、ソゥチョーの問いは声を伴う。だが、当のソゥチョーが答えられない。

答えたい一心で、再びソゥチョーは考えてみる。
彼の心に映し出されるキンマは、きれいだ。スタイルもよい。むっちりしている。だが、惚れた慾目でシャンの牛(1)さと言われりゃ。ソゥチョーは心おだやかじゃいられない。すると、そんな自分の思いにおかしくなって、ソゥチョーは又、ニンマリする。
今朝のソゥチョーときたら。ずっとにやにやしどおしだ。たしかに、ソゥチョーは、浮かれていた。
ティッサ通り(2)に出る。ここには、彼同様、早起きして職場に向かう人間が一人二人、ちらほら見える。
そこで、はるか彼方から近くへ、ソゥチョーの思考は引き戻される。彼は周囲へ目をやった。
昨夜雨が降ったのを、彼は知らない。
昨夜雨が降ったのか。アスファルトの道路が、まだひどく濡れている。
昨夜彼は、早日に眠りについてしまった。どんなふうに眠りについたのかも、覚えていない。鍵をかけるや、まるで止まったエンジンだ。目を閉じるや、眠り込んでいたのだろう。
眠るとなると……例のごとく丸太棒。起床迄一気だ。
そんなふうに、眠りを貪ったのも、今朝心を浮き浮きさせる一因かもしれない……と、彼は思う。いずれにせよ、彼の頭は、冴え冴えとしている。ソゥチョーは、考える。起きて最初に、キンマの顔が心をよぎるなんて、験がよいぜと。
今日は月の第三日目(3)。だから、彼の懐中にも、まだ百チャット余り残っている。昨日、月払いの食費も支払い済みだ。今日着てきた新調の上衣も、昨日買ったものだ。それでも残った金

は、百チャット以上。

ソゥチョーは考える。金だって、人の心を豊かにするものさ。彼の胸は、すがすがしくふくらむ。

バス停迄来ると、ソゥチョーは振り返って車の来る方向を眺めた。まだ見えない。音も聞こえない。そう。この時間帯は、バスの便がまばらなんだ。

そこでソゥチョーは、先へ歩き続ける。次のバス停で待とうと決めたのだ。

機会のある時に道を歩いておかなきゃ。一日中運転してりゃ、体もこわばるんだから。

だが、道の歩き心地は良くない。道が濡れている。だから、草履のかかとからロンジー(4)に、泥がはね上がるのだ。そこでソゥチョーは、ロンジーをぐっと短かくたくし上げ、はき直す。足は基地に着いてから洗うさ。

昨夜降った雨は、かなりの量だったらしい。風も吹いたようだ。この通りの辻で、いつもモヒンガー(5)を売ってる小さな屋台が、倒れちまってるじゃないか。

モヒンガー売りの親子は、まだ店にやって来ていない。はたして彼等は、自分の店の有様を知っているだろうか。

するとふと思い立って、ソゥチョーは市場の方を眺めてみた。茶店の灯火が見える。

この店の紅茶はまずい。どんな入れ方をしてるんだろう。風味ってものがない。おまけにサービスも悪い。

だが、まだ早すぎるし、時間もある。車も来ない。腹も減ってくるとくりゃ。とにかく腹ごしらえに一杯だけ、飲みに入るか——。そう決めると、ソゥチョーは店の方に踵を向けた。

アウン兄貴の茶店と、この店じゃ比べものにならない。アウン兄貴もソゥチョーと同じタクシー運転手。だからって、身びいきで兄貴の店がお気に入りなんじゃない。そうとも。紅茶だってうまい。兄貴の女房のニュン姉さんお手製の両面焼き菓子(6)が、これ又格別だ。十ピャー(7)出して二個食べておきゃ、それだけで正午頃迄腹が持つ。それにサービスも抜群。

ニュン姉さんは、亭主の仲間ってえと目をつぶってくれる。勘定を払わずに出てっても、請求しない。その後も、変わりなく接してくれる。恥をかかせるようなことなどしない。でも、誰だって払わずにゃいられない。今、金がなくて払えなきゃ、自分で覚えておく。そして、ある時に払う。五人の子持ちのニュン姉さん。アウン兄貴の仲間全員が、彼女を慕っている。

ニュン姉さんも出来た人だ。種々雑多な人間が飲みに来る。そんな客の各々を、姉さんだから覚えていられるんだ。この人は甘味たっぷり。この人は渋さをおさえて。この人は甘くて渋いのを。ソゥチョーが店のかたわらに車を停め、入ってゆくと「ほれ——ソゥチョー君に甘くておいしいのを一杯入れとくれ。マライ(8)も入れてね」と、すぐさまその口から注文が飛び出す。それから菓子だ。底の方にあるのをひっくりかえして持ってきてくれる。ソゥチョーの性癖、ソゥチョーの好みを承知してのことである。ソゥチョーは潔癖だ。埃や蠅にも身震いする。だから、底の方から熱くてほかほかの菓子を、いつも選り分けるのだ。

ニュン姉さんを見て、ひそかに舌を巻いた回数など数えきれない。キンマには、ニュン姉さんのようになってほしい。そんな気持が、いつもソゥチョーの胸に溢れる。

キンマのことを、一度アウン兄貴に話したことがある。キンマにも、ついでがあったら店に入って見るよう命じておいた。彼女がそうしたかどうかは知らない。その後尋ねなかったから。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

今入ってる店じゃ、店主はアウン兄貴と似ても似つかない。店はずっと立派だ。店主の服装も、ずっときれいだ。内装や調度も比べものにならない。

店主の女房は、こんな時間なのに髪を結い上げ、化粧をし、めかしこんでいる。年の頃は四十を過ぎたところか。それでも、身につけた金細工のせいで、体全体金かと見まごうばかりだ。

しかし紅茶のこりゃ又薄いことと言ったら。例えて言やあ、若い牝牛のおしっこの姉さんってところかね。

とにかく腹の中は暖ったまってきた。ゲップが一、二度こみ上げてくる。胸がすっかり軽くなった。

ソゥチョーは店を出た。バス停に着くと、たたずむ。東の空が白んできた。

夜明けだ。

# 第二章

マヤンゴゥン(9)基地に着くと、六時かっきりだった。

そこで、大急ぎで事務所に駆け込む。重要なのは、キンマの市場帰りに間に合うよう走らすこと。キンマだって、彼の車の到着を、首を長くして待っているんだから。

キンマは、藤製の手提籠を一つと、タイ製のプラスチックの籠を一つさげているのが常だ。時折、買い物が多ければ、その上にジュートの手提袋を持っている。キンマ一人だけじゃ運べない。それに—テインジーマーケット(10)、コゥンゼータンゼー(11)ボウジョゥッマーケット(12)と、三ヶ所回って買い物するキンマの仕事。

六時四十五分迄は、コゥンゼータンゼーにいるの。その時刻に来なければ、ボウジョゥッマーケットの方へ、サイカー(13)で渡ってるわ。ボウジョゥッマーケットで買い物を済ませたら、いつものとおりよ。何か腹ごしらえをしながら待つわ。八時より遅くはならないでちょうだい。

ソゥチョーはそう言われていた。今日のような朝番の日だと、そんなキンマの声が聞こえるような気がするのだ。絶対忘れてなるものか。だからいつだって、間に合うよう馳せ参じるのさ。

朝番というのは六時開始。午后二時に、仕事を終了させねばならない。この番は、五日に一度だけ回ってくる。

誠意や、やる気がどれだけあったところで、キンマの買い出しを毎日毎日迎えには行けない。ソゥチョー達が自分の班ごと、出番ごと、秩序に従って動くからだ。

とにかくキンマも覚えている。ソゥチョー達の班は第三班。三班が朝六時に出番の日を、カレンダーにバツ印をつけ覚えておく。それに、ソゥチョーの方でもその日を知らせておく。ソゥチョーには、この得がたい絶好のチャンスを逃がすのが心配なのだ。

こうして五日に一度、キンマと並んでキンマと言葉をかわしつつ運転してゆく醍醐味。ちゃんと運転しながらも、キンマの顔をしげしげ見つめられる醍醐味。彼の到着が早い折りなど、コゥンゼータンゼーからボウジョゥッマーケットへ渡る途中、キンマを連れ、マウンカイン通り(14)の中華料理店。それともシュウエボゥンダー通り(15)のインド料理店。どれか一軒の店に一緒に坐り、向き合って飲み食いする醍醐味。どんなことがあっても、この快感は手放したくない。

だから、班長のところで自分の運転日報を急いで探し出す。日報を取り出すと、出勤簿にサインする。そして車のあるところへ歩いていく。

早けりゃ早いだけよい。早く着けばそれだけ長く一緒にいられる。キンマの顔を長い間見つめるチャンスに恵まれる。

だが、国旗への敬礼や宣誓やらで、整列しなけりゃならない。それに所長が、何をしゃべるかわかったものじゃない。例によって、運転中は注意すべし、慎重たるべし云々。昨日おこった交通事故にかこつけて、何とのたまうことか。

おお——神よ——国営四輪タクシーに関するニュース、国民の声、論説などを新聞に載らせ給うな。載ったとすりゃ、最低三十分がふいになるのは確実。班長が、どもりどもり、始めから終

り迄、読んで聞かせることだろうから。

ともかく、ラッパの鳴る前に、ソゥチョーは自分の車のある方へやって来た。彼の車のナンバーは。サの四六六八。乗客三人乗り。二ドア。ガラス張り軽四輪(16)。

サの四六六八は、彼が停めておいた場所に、そのまま寸分の狂いもなく置かれてある。誰も、昨日一日、出して乗った気配はない。

昨日はソゥチョーの非番の日。四日連続乗務すれば一日休める。つまり五日に一度休みがとれる。

ソゥチョーは車の周囲をひと回りして調べてみる。ぴったり締め切った窓ガラス。車輪、ライト、ボディー。ああして仕舞っている間に、破損、傷、くぼみ、筋等がついてないかどうか。丹念に見なけりゃ完璧じゃない。ここへ戻って車を置き、仕舞う時だってそうだ。担当の係官は、厳しく点検してからじゃないと受け入れない。

点検せずうっかり車に乗り、エンジンをかけて出りゃ。ガレージの鉄条網を出るや、一切が自分の責任だ。自分がいない間に、自分が原因でなくて起こったことも、一切自分の責任にされる。このような駐車中に、他の車が出し入れで当てたとしよう。うっかり自分がそのまま車を持ち出せば、他人の非は自分の非となる。自分が犯人を挙げられなきゃ、自分自身が犯人となるってわけだ。

だから乗車前、エンジンをかける前、車輪を転がす前。鉄条網を越す前に、しっかり見なけりゃなるまい。ぐるっとひと回りして点検すると、ソゥチョーはドアを開け、車に乗り込んだ。それからクラクションを押し、バッテリーが上がってないかどうか確かめる。

それからエンジンをかけ、発車する。ガソリン、機械油、グリース等は、例によって仕舞う前に満タンにしてある。ソゥチョーは車をぐるっと走らせてから、事務所の前に停めた。まだラッパは鳴らない。まだ時間がある。時間があれば、その僅かな間、少し見映えがするよう、車の埃を払おうと思いつく。

そこで、家から持ってきて運転席の下にちゃんと忍ばせてあるボロの下着を取り出す。フロントガラスを拭く。ガラスを石鹸やガラス磨きできっちり磨かなくなって久しい。だから雨が降るとくもりやすい。ワイパーが強引に水を拭き取る迄は、前方がよく見えないことが多い。それで、雨が降るとゆっくり走らねばならない。のろのろ運転では、水揚げの基準に合わない。

だが、フロントガラスの半分を磨くだけで終ってしまった。ラッパが鳴ったのだ。ソゥチョーは、国旗掲揚台の前に駆け戻る。

案の定——思っていたとおりだぜ。所長が訓辞を垂れる。昨日、事故が二件あった。二件のうち一件は、こちらの停車中、自家用車がバックしながら衝突したものだ。もう一件は、こちらの人間が悪い。ボウジョゥッ通り(17)を時速約三十五マイルで走行し、追い越したそうだ。追い越す時、白線のすぐ上に立ち止まっていた人間をよけようと、左にハンドルを切った。すると、追い越される車とボディーの横が接触してしまった——という事故。

まだ稀なんだ、こんな事故は。こっちもこっちだ。口を酸っぱくして言われてるのに。何だって乱暴運転をしたがったのか。

さあ——かくして一人のおかげで全員とばっちりさ。この件にかこつけ、所長は訓辞を垂れる。十分。十五分。二十分。

急ぐ時に限って、時間をかけやがる。もう六時半だ。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c